本書は、現在ムスリムの生存基盤、特に食（ハラール食）の文脈で研究を行っている評者にとっても大変有益であった。本書で指摘されているように、永住を希望して欧米諸国を目指す移民労働者と、永住に重きを置いていない湾岸諸国における移民労働者は対照的な存在である。この視点から見える論点は、評者がこれまで西欧諸国や中東、東南アジアにおけるフィールド調査において確認してきたムスリム移民が経営する食堂やレストラン、精肉店などの状況にも共通している。そのため、移民労働者の社会経済状況が食の文脈にも影響を与えていることがはっきりと看取された。

グローバル化の進展と並行して今日進んでいるのが、急速にありとあらゆるモノ（物質だけでなく、人や物、情報など）を消費していく時代の風潮であるが、様々な理由から母国を離れた移民労働者として生存基盤を構築している人々は、そのような風潮からどのような影響を受けていくのであろうか。これは地域研究者にとって、今後関心を持って取り組むべき大きな課題であると感じられた。本書に示されているような多面的・多角的な研究が日本国内でも国際的にも発展していくことを願っている。

（桐原　翠　日本学術振興会特別研究員（PD）
立命館大学衣笠総合研究機構プロジェクト研究員）

安達智史『再帰的近代のアイデンティティ論――ポスト9・11時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム』晃洋書房　2020年　xiii＋418頁

2001年にアメリカで発生した同時多発テロ事件や2005年にロンドンで起こった同時爆破テロ事件、そして近年の難民問題などの国際社会を揺るがせた大事件によって、しばしばムスリム系移民は公の議論の的とされ、排外主義や批判の対象とみなされてきた。本書は、そのように移民・難民の包摂と排除が常に問題となってきた西洋に生きるムスリム系移民の在り方について、イギリスの移民第二世代にあたるムスリムのアイデンティティに焦点を当てて分析するものである。著者曰く、本書が取り組もうとしている課題は西洋社会とイスラームの両立といった「社会統合の（不）可能性をめぐる問い」（p. iv）ではなく、「『ムスリムの若者はいかにイギリス社会に統合しているのか』という方法や戦略をめぐる」（p. iv）問いに端を発している。本書はこの問いに答えるべく、多くの移民第二世代のムスリムの語りが分析の対象となっており、豊富なインタビュー調査に基づいた充溢した議論が展開されている。なお、本書の議論のベースとなるイギリスにおける多文化主義と移民の社会統合の展開に関しては、著者の前著である『リベラル・ナショナリズムと多文化主義――イギリスの社会統合とムスリム』（勁草書房、2013年）に詳述されているため、そちらも併せて一読することをお勧めする。

本書は、研究の背景と理論枠組みについて述べている第I部と調査の分析に主眼を置いた第II部によって構成されており、章立ては以下の通りである。

第Ⅰ部　背景・理論枠組み
　第1章　イギリスの移民第二世代ムスリムのアイデンティティと社会統合――二重意識、女性、多文化主義
　第2章　イギリスにおけるムスリム――形成、政治、現状
　第3章　先行研究と理論的フレーム
　第4章　調査概要
第Ⅱ部　分析・結果
　第5章　差別、メディア、表象
　第6章　ブリティシュネスと「多文化空間」としてのイギリス
　第7章　〈文化／宗教〉の区別
　第8章　イスラームの〈知識〉とインターネット――イジュティハードの機能
　第9章　女性と教育

第 10 章 ヒジャブの意味論
終章　　結論――新たなるイスラーム理解に向けて

第 1 章は、本書のテーマの中心となる移民第二世代のムスリムのアイデンティティと、彼らをどのように包摂するのかという西洋社会の社会統合の問題について先行研究の検討と整理が行われる。著者は 20 世紀にアフリカ系アメリカ人が有した「二重意識（double consciousness）」（p. 4）、すなわち黒人系に対する差別が日常的な社会において自己を常に他者の視線を通して見るという感覚は、今日の西洋社会に生きるムスリムに対しても当てはまるのではないかと述べる。そして、その西洋のムスリムが二重意識を抱くきっかけとして決定的だった出来事として、2001 年の 9.11 同時多発テロ事件が挙げられている（p. 5）。9.11 以降、現代の若者ムスリムたちは西洋社会で生まれ育ったにも関わらず、その社会に対する忠誠心を常に問われ続けている状況に置かれていると、著者は指摘する（p. 6）。本章ではさらに、イギリスのムスリムをめぐる社会統合政策が多文化主義的政策から、「インターカルチュラリズム」と「リベラル・ナショナリズム」という 2 つの潮流を組み込んでいく政策に 2000 年代を通じて変化していった経緯が述べられている（p. 20）。これによりイギリスの社会統合政策の文脈において「コミュニティの結束（Community Cohesion）」政策や「ブリティシュネス＝イギリス人性（Britishness）」が強調されるようになった（p. 22）。これらの考え方は、イスラームが民主主義的価値とは両立不可能なものであり、かつムスリムのアイデンティティを硬直的で文化主義的なものとして捉えており、イスラームを「他者化」するプロセスであると、著者は指摘する（p. 24）。著者によれば、現代イギリスにおけるムスリムを「他者化」するディスコースが支配的な中で、ムスリムのアイデンティティは「再帰的に達成されるべき課題」となっている（p. 34）。この点に関しては、第 2 章の中でもさらに説明が付け加えられている。

第 2 章では、イギリスにおけるムスリム・コミュニティが歴史的にどのように形成されていったのかについて、イギリスのインド植民地統治期に遡った説明から始まる。インド人はイギリスの兵士や東インド会社の水夫として動員され、戦争の期間も重要な労働力として任用された。こうした水夫たちが、ロンドンやリヴァプールなどの港町に滞在するようになり、ムスリム・コミュニティの基礎が形成されていくこととなった（p. 41）。第二次世界大戦後は、西インド諸島やパンジャブ、グジャラートなどの地域からの非白人系のイギリス移住が増加していくこととなった。その背景として著者は、「ピラーダリ」と呼ばれる親族システムを基盤とする、主に男性が一時的に移住して家計を助ける「移住文化」が大英帝国期の支配の中で培われていたことを挙げている（p. 44）。こうしてイギリスにおけるムスリム・コミュニティが拡大していく中で、当初はエスニック集団としてみなされていなかったムスリムであったが、イスラームを侮辱するものとして世界的な大問題となった作家サルマン・ラシュディの小説『悪魔の詩』をめぐる事件などを経て、イスラームが宗教的アイデンティティとして理解され、ムスリムはイスラームという共通点をもったアイデンティティ集団として認識されるようになっていったことが説明される（p. 55）。本章の最後には、イギリスのムスリムに関する人口統計や諸データが参照されている。これらの統計より、イギリスにおいてムスリム人口の増加が著しく、かつムスリムは他の主要宗教と比較して宗教実践への参加度が高いことが明らかとなっている。一方で、彼らの約 7 割以上がイギリスやサブネイションに対するアイデンティティを有していることが指摘されている（p. 77）。

第 3 章で著者は、アイデンティティに関するいくつかの理論とムスリムをめぐる言説の先行研究を検討し、本書が採用する再帰的近代のアイデンティティ論の有用性を強調する。ここでは、アイデンティティが閉鎖的なものであるとみなす立場と開放的であるとする立場のそれぞれに関する先行研究が紹介されている。前者の立場は文化やアイデンティティを硬直的で不変的であるとみなすことへの批判があり、後者は全世界的に若者ムスリムがイスラームへのコミットメントを高めているという現象を説明できていないことが著者によって指摘されている。以上の点から、著者はアイデンティティの有する閉鎖性と開放性を同時に説明する枠組みが必要であると述べ、再帰的近代化論に着目した分析枠組みを提示する。「再帰的近代化」はアンソニー・ギデンズによって提示された概念であり、「再帰的近代とは、モノ、カネ、ヒト、資本、文化のグローバルな移動にともない、これまで人々を区分けていた空間的・意味的境界が崩れ、そのなかで『より開かれ、より問題を抱えた未来』と向き合いながら生きることが余儀なくされる時代」であると著者は述

べている（pp. 112–113）。著者によれば、再帰的近代では伝統は個人のアイデンティティの源として位置づけられているものの、個人のアイデンティティは伝統だけでなく広く社会との関係性の中で再定義されることが要求される（p. 113）。ここで重要となるのが、グローバル化の中で個人が伝統や宗教について解釈実践を行うことが可能となり、伝統や宗教が再生産されるという点である。再帰的近代化論は「個人の再帰的解釈と選択的取り入れをめぐる能力と実践の可能性を強調」（p. 116）し、伝統に対する閉鎖性と開放性を明らかにする分析枠組みであると著者は説明する（p. 116）。

第 4 章は、調査の概要が説明されている。本書の研究は、イングランド中西部の都市コベントリーおよびロンドンにおいて実施された調査に基づいている。2 つの都市はともにインド亜大陸からの移民が多く居住しており、本書の調査対象はアジアにルーツを持つ若者ムスリムが中心である。著者はアウトサイダーとしての自身の立場に言及しつつ、インタビュー調査でのインフォーマントの語りの解釈に着目する解釈的客観主義に基づいて分析を行っている点を述べている。また調査のインフォーマントの特徴として、信仰に篤くて宗教実践への参加度が高く、高学歴であり未婚である者が多数を占めている点が挙げられている。

第 5 章以降は本書の第 II 部となり、調査の分析と結果が論じられている。第 5 章では、ムスリムへの差別やイスラームに対するメディアの表象をめぐる問題について、若者ムスリムたちの語りを通して分析されている。ここでは、とりわけ西洋社会のムスリムにとって 9.11 同時多発テロ事件がアイデンティティ形成に大きな衝撃を与えた出来事であったことが強調される。著者は、9.11 事件以降のムスリムは他者によって「ムスリム性（Muslimness）」を絶えず意識させられるような環境にいることと、そのことがしばしばイギリス社会にムスリムとして暮らすことに困難を感じる原因となることを、インフォーマントの語りを引用しながら指摘する。また、日々の中で差別を受けた経験を持つ者の多くが女性である点に触れ、ムスリム女性がヒジャブを着用するが故に「可視性」を有している点を指摘している。もちろん女性だけではなく男性も含めて、移民第二世代ムスリムは「二級市民」として他者化されてしまう問題がインフォーマントの語りより浮き彫りとなっている（p. 165）。また、メディアもムスリムのアイデンティティ形成に影響を与えるものであると著者は述べている（p. 171）。それは、メディアの報道がイスラームやムスリムについての「ステレオタイプ」を作り出すことに起因する。ただし、本章ではこうした状況を否定的に捉えるムスリムばかりではなく、社会の偏見を知識の不足と結びつけてより正しい知識を伝えることをイスラーム的な義務として捉える者の語りにも言及されている（p. 159）。

第 6 章は、若者ムスリムとブリティシュネスの関係性に着目した分析が展開される。著者によれば、ブリティシュネスという概念は民族に基づく概念ではなく市民的な概念であるために宗教的アイデンティティとの両立が可能であると考えられている。とりわけエスニック・マイノリティにとっては、それは身体化されたアイデンティティではなくパスポートと結びついた形式的、制度的な属性として認識されていると著者は指摘する（p. 187）。本章は、移民第二世代ムスリムがブリティシュネスをどのように捉え、イギリス社会と関わっているのかという問いを明らかにしようとするものである。著者はインフォーマントの語りより、イギリス人であることがエスニックな属性というよりも祖国やホームといった言葉で表されるような居住経験と結びついた属性であると述べる。それはイギリス人であることが他のアイデンティティと対立するものではないことを意味していると、著者は指摘する。また、「飲酒」や「女男交際」など一部のイスラームが忌避する行為はイギリス社会の文化として認識され、イスラームとは異なる生活様式として受け止められていることが、インタビュー調査より明らかにされている。したがって著者は、イギリスの文化とムスリムの生活様式は両立するものではないものの、ムスリムがどのようにイスラームに従うのかという点については「個人の選択」の問題であり、イギリス社会の文化にどのように関わっていくのかについても個々人の基準があると説明している。さらに、ブリティシュネスは移民第二世代ムスリムたちの文化や生活様式と対立するものではなく、イギリス社会の価値としてイスラームと共存するものしてとらえられると著者は述べている。さらに本章では、インフォーマントがイギリス社会を「多文化空間」として認識し、評価している点について触れられている。

第 7 章ではイスラームの側面に着目し、インフォーマントがいかに宗教と文化を区別して捉えてイギリス社会の生活を営んでいるのかという点について明らかにすることを目的としている。著者によると、インフォーマントはイスラームと文化を区別しており、そのことはアイデンティティに関わる戦略として、時に

イギリス社会に溶け込むことを容易にする (p. 227)。例えば、女性の抑圧の問題はイスラームという宗教によるものではなく移民第二世代がルーツを持つ出身社会の文化によるものであるとされる、と著者は指摘する (p. 229)。インフォーマントにとって、むしろイスラームはイギリス社会と両立可能な開放的な性質を持つものとして捉えられている点も重要である。さらに、分断的な性質を持つ文化と対比して、イスラームは文化やカーストなどの社会的階層を超越して平等に人々を結束させる力を有すると理解されていることが指摘されている (p. 234)。しかし、それは女性の抑圧や強制結婚などのネガティブな問題の原因を出身社会の文化に起因すると考えることによって、イスラームに否定的な言説からイスラームを守っている側面があると著者は分析している。最後に、文化と宗教を明確に区別していないインフォーマントの事例が紹介されており、彼女たちがイギリス社会のなかでムスリムとして振る舞うことに対して困難を感じていることが述べられている。

第 8 章は第 7 章で論じた文化と宗教の区別を可能にした要因としてイスラームに関する「知識 (knowledge)」に着目する。近年のインターネットの発展などにより、若者ムスリムたちは非イスラーム圏であるヨーロッパ社会の中でイスラームの教えを実践するための知識へのアクセスが容易となっている。イスラームに関する知識はウラマーなどの一部のエリート知識人に占有されるものではなく、個人によってイスラームの解釈を発信できる時代が到来しており、著者はこの現象を「信仰の民主化」と称している。本書では多数の事例によって、個々人がインターネットなどのテクノロジーを通じてイジュティハードに参画していることが示されている。著者は、そうした個人のイジュティハードについて主体とイスラームという集合的アイデンティティの関係性を規定するようなエージェンシーの行為であると結論づけている (p. 279)。

第 9 章では、日常的にイジュティハードを行う重要な主体として女性に焦点を当てて、特に女性たちの教育にたいする意識について分析する。著者によると、ムスリム女性は教育に高い関心を有している。高等教育を受けることは、移民第二世代のムスリム女性にとってアジア的な家族観における女性の役割（特に結婚）とは別のキャリアを築くことを可能にするために必要な条件として意識されていることが指摘されている (p. 290)。ここで興味深い点は、ムスリム女性の間においてイスラームは「女性の自立を促す宗教」(p. 296) として捉えられており、その根拠としてイスラームが預言者ムハンマドの時代から女性に権利を認めてきた宗教であり、その象徴としてムハンマドの妻たちの名前が挙げられているという点である。一方で著者は、ムスリム女性にとってイスラームの観点から子どもの教育が非常に重要であるが故に、子育てに従事するために女性が労働市場に参入する機会が減少しているのではないか、と述べている。

第 10 章は、イスラームを可視化させるアイテムの一つである「ヒジャブ」を取り上げ、ヒジャブの着用がどのような意味を持ち、イギリス社会への統合とどのように関係しているのかについて論じられている。著者によれば、男性も含めてほとんどのインフォーマントがムスリム女性にとってヒジャブの着用は重要であり、ヒジャブはムスリムであることを示すアイデンティティ・マーカーであると認識していた (p. 317)。さらに、ヒジャブはムスリム女性の「慎み深さ (modesty)」を表現するものとして認識されていると、著者は指摘する (p. 318)。女性にとってヒジャブを着用することは自身の自尊心を守ることにつながり、それは他者のためではなく「神との関係の中で着用される」(p. 327) ものであることが論じられている。また、本章ではヒジャブを着用しない者についても目を向けている。著者によれば、インフォーマントの間ではヒジャブを着用するか否かという点のみでそのムスリムが善良で宗教的かどうかは判別されていない (p. 332)。また、ヒジャブの着用を個人の自由意志に基づいた行為であるとみなし (p. 337)、巡礼のように人生における選択として「準備ができたとき」(p. 341) にヒジャブを着用するという考えを持つ人々も一定数存在することが述べられている。

終章では、本書の概括と結論が述べられている。著者は、西洋社会において移民第二世代のムスリムが日々自身のアイデンティティと向き合わなければならない状況に置かれていると同時に、イギリス社会が多文化空間として機能し、ブリティシュネスと彼らの宗教的アイデンティティが共存している点を指摘している (pp. 360–361)。さらに、イギリスの多文化主義はムスリムとしてのアイデンティティを肯定する空間を提供するものであり、それは西洋社会からの逸脱ではなくムスリムとして民主的なシティズンシップを共有する動きであると、著者は論じる (p. 366)。最後に著者によって本書の学術的貢献について述べられたのち、課題と展望の提示によって締めくくられている。

以上、各章の内容を概観したように、本書は移民第二世代の若いムスリムたちがいかに自身の有するアイデンティティを理解し、イギリス社会の中で日々の暮らしを営んでいるのかについて、インタビュー調査に基づく肉厚な記述を行うとともに再帰的近代のアイデンティティ論という新しい観点から論じている点に大きな意義があるだろう。西洋社会と相容れないイスラームというステレオタイプな見方に対して、著者は詳細に先行研究を検討しながら豊富なインフォーマントの語りを分析し、説得力のある反駁を行っている。特に、テクノロジーの発展から個人レベルでのイジュティハードが可能となり、とりわけムスリム女性は教育やヒジャブの着用を通してイスラームとの関わり方を選択し、実践しているという指摘は非常に興味深い。

このように非常に有意義な本書の議論であるが、本書が対象としている移民第二世代ムスリムの属性の偏りについては頭の片隅に留めておきたい。著者が第4章で述べている通り、本書の対象とするインフォーマントはバングラデシュやパキスタンなどのアジア系のエスニシティを有しており、高学歴かつフルタイムで就労している者が大半を占めている。前者のエスニシティに関して、第7章においてインフォーマントがアレンジド・マリッジなどを事例に文化と宗教を区別し、インフォーマントがアレンジド・マリッジなどの抑圧的慣習をイスラームではなくアジアの文化に由来するものとしてみなしている点を著者は指摘しているが、これは他の地域（例えば中東地域）に文化的帰属を有する場合であっても同様な指摘が可能なのか疑問に感じた。評者が研究しているシリア難民の事例から考えると、彼らのアラブ文化はイスラームと区別できるようなものではなく、かなり密接に影響し合った不可分のものに思われる。つまり、著者が指摘するようにイスラームを擁護するために文化が犠牲として差し出されているというよりも、そもそもエスニシティの問題として「アジア」に対する否定的なディスコースがアジア系であるインフォーマントの中に存在しており、それがイスラームと対比されているのではないか、という疑問である。また、後者の高学歴なインフォーマントが多いという点について、本書のインフォーマントと異なって高等教育を受けてこなかった移民第二世代ムスリムたちがどのように自身のアイデンティティを規定しているのかについても比較が行われると、さらに本書の説得力が増すだろう。

本書は総じていえば非常に学術的意義のあるものであり、移民・難民研究に従事する者だけではなく、アイデンティティ論やイギリス社会、イスラームについて学ぶ者をはじめとする広い読者に是非一読をお勧めしたい。

（望月　葵　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

野田仁・小松久男（編著）『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社　2019年　315頁

「中央ユーラシア（中央アジア）とはどこか」と聞いて、答えられる日本人は一体どれくらいいるのだろうか。少なくとも評者は、（専門家を除いて）そのような日本人と出会ったことがない。かくいう評者自身も、ほんの数年前まで同様であった。とはいえ、それと聞いて連想するものがないかといえばそうでもない。たとえば「シルクロード」や、近年ならば中国の「一帯一路」政策、天然資源の産出国としてカザフスタンの名前をニュースや新聞で聞いたことがあるかもしれない。けれども、それでもなお中央ユーラシアに対して、大方の日本人は曖昧でぼんやりとしたイメージしか持っていないというのが現状なのではないだろうか。

本書はそうした、いまだ漠然としか捉えられていない中央ユーラシアの歴史像を、読者に鮮明にイメージさせることを目的に編まれた論集である。時代としては、中央ユーラシアが近代帝国に包摂されていく19世紀から20世紀初頭に焦点をあてる。地理的範囲としては、ロシア帝国支配下におかれた西トルキスタンと清朝支配下におかれた東トルキスタン、すなわち現在のウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、新疆ウイグル自治区を対象とする。大学生・大学院生を中心に広く中央ユーラシアに関心をもつ読者に向けて編まれた本書は、15名の執筆者らによる最新の現地調査を踏まえた研究成果を伝えるものである。

本書は、はじめに、プロローグ、エピローグのほか、13章で構成される。全体の章立て及び執筆者は以下の通りである。